
泣けばいいってものなのか？

素倉てす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣けばいいってものなのか？

【Nコード】

N3588T

【作者名】

素倉てす

【あらすじ】

高校に入ってグレていた俺はケンカやかつあげの毎日だったんだ。でもそんな俺の前に女の子が現れてよ。でもそいつはなんか変なやつだったんだ…

（前書き）

この小説には性^{セックス}に関する部分があります。そのようなのが嫌いな方はご注意ください

俺、ジヨウ。ま、名前なんてどうでもいいさ。俺は中学のときはけっこうスポーツも出

来てよ、成績も良くてよ（頭はそんなに悪くなかったからな。というか、けっこういい方

だったみたいだよ）いわゆる優等生ってやつをやっていたんだ。顔もまあまあだよ、そん

時はあまり意識してなかったけれど、女の子にもそれなりに人気があっただ（と思う）。

でも、気持ちが悪すぎでよ、他の奴らから見れば弱っちく見えただろうな、よくい

じめられてよ、泣いてばかりいたんだ。体はけっこう大きかったし、スポーツをやっていた

たからな、体力も力もあったと思うんだけどよ、それとケン力が強いってのはやっぱり別物

だよな。

そんな俺だったんだけど、高校に入った頃に（何がきっかけだったかもう忘れちゃった

けれど）、考えがすっかり変わっちゃってよ、『泣けばいいってもんでもないだろう』と

思ったんだ。それからずっとケンカばかりだよ、今まで俺をいじめていたやつらと徹底的

に殴り合ってよ、向うの方がケンカ慣れしてたから分は向こうの方にあっただけ（向うの

方が有利だったけどよ）、長期戦になりや体力と力のある俺の方が圧倒的でよ、最後はい

つも俺が勝ってたぜ。

そんなんでケンカばかりしててよ、そのうち調子に乗ってかつ

あげはするわ、女は輪姦^{まわ}すわ、もういっぱいしの悪^{わる}だったぜ。成績は下がる一方だし、素行不良

でセンコーには目を付けられるし、以前の優等生の面影なんぞ全然無くなっちまったぜ。

でも、少しでも言い訳させてもらえばよ、好きでケンカばかりしてたわけじゃないんだ。

こちらが悪いわけでもないのにいじめられてよ、センコーに言っただけで助けてくれるわけ

じゃないし（ひどいときなんか見て見ぬふりだぜ、まったく『それでセンコーかよ』と思

ったぜ）、俺にしてみりゃ正当防衛だったんだ。だからセンコーに何言われても、言うこ

となんか聞く気もなかったぜ。

かつあげや女輪姦^{まわ}したのはやり過ぎだったけどよ、かつあげって言っても昼飯

のパン代二、三百円せびるだけだったし、かわいいもんだぜ。女輪姦^ましたって言

っても一回だけで、向こうの女も（女子高生だったけど）けっこうやってる女だよ（ヤリ

マンって言うのかな）、やって楽しんだ後はすっかり仲良くなっちまってよ、一緒にヤニ

なんかふかして、別れたんだ（その後会うことも無かったけどな）。しばらくはそんな毎日だったんだけど『こんな事ばかりやって

いていいのか？』という気持ちはずっとあったんだ（根はまじめだったからな）。そんな

んでケンカやかつあげばかりの毎日にそろそろ嫌気が差してきた頃にあいつと出会ったんだ。

そんなときや仲間二、三人で、いつものようにかつあげっていうか昼飯のパン代ねだって

いたんだ。相手は同じ高校の野郎でよ、昼飯代少し貸してくれないかって言っただ（返

したことはなかったけど）。相手はすっかりびびってしまっ、見ていてかわいそうにな

ってよ、もうこんなこともやめようかと思っちまったぜ。

そしたらあいつが出てきたんだ。両手をひろげて俺の前に立ちふさがってよ、やめさせ

ようとしたんだろな、なんかちっちゃい女の子で、どこかで見た制服だと思ったら同じ

（おんなじ）高校じゃねえか。だけどこっちも勢いってもんがあるからよ、「どけよ、ど

かないとケガするぜ」って言っただ。それでも必死に両手広げて邪魔するから「どけよ、

この馬鹿野郎」って怒鳴っただ。それでもあいつは泣きそうになりながらも動かないん

だ。そうしている間にかつあげしてた相手は逃げちまうし（女の子残して良く逃げるよ

な）、俺はムカツときてよ、てつきりその女輪姦まわそうとして、裏の空き倉庫に連

れ込んだんだ。

それであらためて顔を見ると真面目そうなけっこうかわいい顔しててよ、こりやどう見

ても処女バージンだぜ。ヤリマンならともかくよ、処女なんて犯してもビービー泣く

だけでちつとも面白くないし、センコーに言われたり、警察に駆け込まれたりしたら後が

大変だぜ。かといって仲間のやつには輪姦まわすって言っちまったし、しようがない

からやったことにしてなんとかごまかすことにしたんだ。

それでちよつとかわいそうだったけど「服のボタンはずしてブラジャーはずせ」って言

ったんだ。あいつは犯されると思って真っ青になってたけどよ、それで「パンツも脱げ」

って言ったんだ。あいつはもう半分泣いてたけどよ、そんな方法しか思いつかなかったん

だ。それで受け取ったパンツとブラジャーをわざと見えるようにポケットに突っ込んでよ、

そこらに落ちていた棒切れ拾ってよ、近くにあつた段ボール箱思いつきり叩くから、そう

したら叫べって言ったんだ。あいつは変な顔してたけど、「叫ばないんなら本当に叫ばせ

てやるぜ」って言ったなら必死にうなづいていたぜ。それでダンボール二、三回叩いて叫ば

せてから今度は「泣け」って言ったんだ。あいつはまた変な顔してたけど、ちよつと恐

い顔したらすぐビービー泣き出したぜ（さつきからもう半分泣いていたしな）。まったく

よ、輪姦^{まわす}なんて言っちゃまったおかげで大変な手間になっちゃったぜ。それで少し時間を置いてからあいつと一緒に仲間のところに戻っ

てよ、わざとあいつの

下着が見せつけて、「こいつは気に入ったから俺の女にするからおまえら手を出すんじゃないぞ」

って言ったんだ。あいつら、ちえっ、独り占めかよって言うってたけどよ、睨みつ

けてやったら黙っちゃまったぜ（かつあげするのにつるんでいただけで、友達ってわけでも

なかったしな）。

しばらくあいつと一緒に歩いてよ、もう大丈夫だと思ったから、

下着を返して、「悪い事したな。気をつけて帰れよ」とか言って別れりゃよ、何も問題はなかったんだ。でも、さっきあいつの下着を受け取ったときの生暖かい感触が残っていてよ、ついついあいつに言っちまったのが運の尽きよ。

「頼みがあるんだけどよ、その、ええっと、なんだ、ブ、ブラジャーだけでも貰えないかな？」って言っちまったんだ。

そのときはもうあいつは泣き止んでいたんだけど、俺のこと睨みつけてよ、「五百円」
って言うんだ。

「えっ？」

「ブラジャーは五百円、パンツは千円よ。合わせて千五百円」

「そりゃちよつと高くないか？」

「要らないんなら返して。捨てるから」

「捨てるのか？ もったいない」

「あんたの触った下着なんかはける訳ないでしょ。買わないんなら返してよ、捨てるから。買うんなら千五百円」

それで俺もやめりゃ良かったものを、千五百円出して買ってしまったぜ。まったく、かつあげするはずがとんだ出費だぜ。それで家に帰ってよ、夜になつてからあいつのパンツ握りしめてよ、あいつの顔思い出しながら三回もマスかいてしまったぜ。うわー、情けねえ。

それで次の日学校に行くと、教室にあいつがいてよ、真っ青だぜ。どっかで見たような

顔だと思っっていたけど、同じクラスの女の子じゃねえか。いつも俯うつむいて下ばっ

かり見てるような女の子だったから印象が薄かったんだな。同じクラスの女の子のパンツ

買ってよ、それでマスかいてたなんて知られたらもう学校に来れないぜ。それで心配にな

ってあいつのことをずっと気にしていたんだけど、あいつは俺のことなんかすっかりシカ

トしていてよ、ほっとしたぜ。それからケンカもかつあげもなんかやる気なくしてよ、

家に帰ってもボーっとしている事が多くなったんだ（相変わらずあいつのパンツでマスかいていたけどよ）。

しばらくしてクラスで席替えがあつたんだ。それまで俺はけっこう前の方の席でよ、セ

ンコーに目を付けられることが多くてうざかったんだけど、今度はずっと後ろでよ、これ

なら楽勝だぜ（何が楽勝なんだかわかんないけど）。それで前の方を見ると斜めのだいが

前の方にあいつが座っているじゃねえか。背中だけでもあいつが見えるようになってよ、

なんか嬉しかったぜ（俺ってばあいつにホレてるのか？）

だけど良く見ると、あいつ自分の机の中に空のペットボトルとか丸めた紙くずとかいっ

ぱい入れているんだ。おかしなやつだと思ってよ、休み時間にあいつの席まで行ったんだ。

なんでごみみたいなものを机にいっぱい入れているのか聞きたくてよ（なんだかんだ言っ

てもあいつと話したかったのかな）。それであいつの席まで行ったんだけど、あいつ泣き

そんな顔をしてるんだ。それであいつの机を見ると、机の上いっぱい落書きがしてある

んだ、消せないように油性のフェルトペンでよ。それで、「うざい」とか「ださい」とか

「死ね」とか書いてあるのよ。それも机の上だけでなく、あいつの教科書やノートにま

で書いてあるんだぜ。それでわかったけどよ、あいつはいじめにあっていたんだ。机の中

のごみも自分で入れたんじゃないやなくてクラスの誰かがあいつをいじめるために入れたんだ。

それでいじめを止めさそうとしたんだけどよ、その頃には俺もけつこう賢さかしく

なっていてよ、まず前哨戦としてホームルームのときに立ってよ、しらつとして「先生、

このクラスでいじめがあるのを知っていますか？ やめさせてください」っていったんだ。

もちろんセンコーからまともな答えが返ってくるはずなのは分かっていたけどよ（これは

は手始めのジャブというところかな）。

そうしたらセンコーの野郎「いじめなんかないぞ。いじめがあったとしたらいじめてる

のはお前だろう」とか言いやがってよ、みんな一斉に爆笑よ。それで俺は黙っちまったん

だ。やっぱりセンコーはやる気なんかないんだ。ま、俺は俺だけでもやるつもりでいたか

らよ、センコーがどう言おうと関係ないぜ。あいつをいじめていたやつは一人や二人じゃ

なくて結構いたんだけど（中には女もいたけどよ）、先頭きつていじめていたやつは分

かっていたからよ、放課後そいつを呼び出してよ、少し強めになで

てやったんだ（げんこ

つでよ）。骨が折れない程度に、特に顔を腫れ上がるほど何度も何度も殴ってよ、あんまり長い事殴っていたものだから最後は手が疲れてきたぜ。

あいつが泣きながら「何でそんなにいじめるんだ」って言うからよ、「お前がいじめら

れたのはたかだか三十分位だろう」って言ってやったんだ。「あの女の子はもう何カ月も

いじめられてんだ、思い知れ」って言ってまた殴ってよ。そうしたら今度は「何で僕だけ

いじめるんだ」って言うからよ、「関係ない」って言ったんだ。「だれがあの子をい

じめようが、あいつがいじめられたらお前を殴る」ってよ。「だからあいつがいじめられ

そうになったら、お前が止めるんだな。どうせ殴られるのはお前なんだから」って言って

また殴ったんだ。「そんなバカな」って言ってたけどよ、「お前の好きにすればいいぜ」

って言ったんだ。「だけどあいつは俺の女だからよ、またあいつがいじめられたらお前を

殴るけどよ、そのときや俺もムカツと来てるから、あばら骨の二、三本は折れるかも知れ

ないな。折れたあばら骨が心臓に刺さって死ぬかも知れないけどよ、運が悪かったとあき

らめてくれや」って言って脅してよ、あいつ真っ青になってうなずいていたぜ。

翌日学校に行くとよ、あいつが腫れ上がった顔で泣きそうにしていてよ、他のやつらが

またいじめをやるうとしたら真っ青になって止めてたぜ。俺もそいつらを睨みつけてやつ

てよ、いじめをやつてた奴ら震え上がっていたぜ。これで俺もすっかり悪になつ

ちまつたけれどよ、今回はいじめをやめさせるためだからよ、堂々としたもんだぜ。

放課後職員室に呼ばれてよ、「なんでクラスメートを殴ったりしたんだ」って言うから

よ、「あいつがクラスの女の子いじめていたからよ、いじめられたらどんな気分がするか

実地教育してやったんだ。教育的指導ってとこかな。まったくできない悪いクラスメート持

つと苦労するぜ」って言ったらよ、センコーの野郎真っ赤になって怒りやがって、「お前

の殴った生徒の親が怒鳴り込んできたんだ、いじめとかそういうことは先生にまかせてお

けばいいのに、なんでお前が直接手を出すんだ」って怒鳴るからよ、「俺はホームルーム

のときクラスでいじめがあるから止めさせてくださいって言ったんだ。それでもあんたは

何もしなかっただろう。だから代わりに俺が女の子をいじめる悪人に天誅（てんちゆう）、

天罰（てんばつ）の事を加えたんだ。ま、正義の味方ってとこかな。まったくできない悪いセンコー持

つと生徒は苦労するぜ」って言ったらセンコーの野郎唇ふるわせて怒ってよ、俺の親が呼

び出しよ。俺の両親は共稼ぎで家に居なかったんだけど、母親が仕事途中で休んで飛んで

きてよ、こんどはセンコーと母親と二人がかりで説教だぜ。いじめられていた女の子助け

たつていうのによ、まったくこれじゃ正義のヒーローも浮かばれないぜ。

そこで家に帰って夕食のときよ、母親が、「あんたは中学のときはほんとにいい子で自慢の息子だったのに、高校に入ったとたんぐれ出して、まったく困った子になってしまった」とかぐだぐた言うからよ、「うるせえな、このババア！」って言ったら、とたんに隣に座っていた父親に目いっぱい殴られたぜ。俺はケンカばかりで殴られるのも慣れていたからそうでもなかったけどよ、母親のほうがびっくりしておるおろしていたぜ。

センコーどころか親にまで理解されずによ、まったくヒーローってのは孤独だぜ。おれは部屋に戻ってすっかりふて腐っていたけどよ、思い出して、あいつのパンツでマスかいってしまったぜ。助けた女の子のパンツでマスかいてるなんてよ、ほんと情けないヒーローだぜ。

翌日学校に行く俺はもうすっかり悪人扱いでよ、クラスの奴ら俺を避けるようにしてるんだ。ヒーローが孤独だって言うのはほんとだな。俺はあいつと話なんかしたかったけどよ、あいつも迷惑だろうと思って話しかけるのはやめたんだ。それでも気になってよ、ちらつとあいつのこと見たら、いじめが無くなったせいだろうな、けっこう元気になっていてよ、俺はほっとして、それからあいつの事見るのも止めたんだ（あいつが俺と関係あると思われたらあいつも迷惑だろうしよ）。

二、三日したら職員会議で三日間の停学（正確に言えば自宅謹慎

つてか)になっちまつたぜ。でも考えてみりゃ別段学校に来たからって面白いわけでもないしよ、堂々と学校休めて嬉しいくらいだぜ。

親は共稼ぎで昼間は俺一人だからよ、好きなことやろうと思っていたんだけど、テレビもゲームもマンガもすぐ飽きちまってよ、退屈だったらないぜ。一応自宅謹慎だから外うろろろ歩くわけにもいかないし、まいったぜ。それでしょうがないから教科書持つてきて読み出してよ(こんなところが元優等生だな)、そうしたらなんか結構面白くなってしまつて(そつえば勉強するのも久しぶりだぜ)、片っ端から教科書読んでいったんだ。わからないところは後でセンコーにまとめて聞くことにして、印しを付けてページの端を折つておいてよ、しばらく教科書なんて読んだことなかったから結構暇つぶしにはなつたぜ。

それでも三日目の午後になると教科書にも飽きて(もうあらかた読んじまつたし、二、三回読んじまつたのもあるぜ)、暇でかなわなくなつてよ、それで(まだ昼間だけど)あいつのパンツでマスでもかこうかと思つたんだ。そのとき誰か来ても、誰かと思つて玄関にいったらあいつがいたんだ。半ズボンにＴシャツ着てて、かなり(つていうかやばいくらい)かわいいくてよ、私服のあいつなんて見たことなかつたし、すっかりどぎまぎしてしまつたぜ。あいつ俺の部屋を珍しそうに見回したり、俺の机の引き出し開けて覗いたり

していたけど（隠してあるあいつのパンツが見つからないかとヒヤヒヤしたぜ）、それで
あいつ俺のベッドに腰掛けたんだけど、やけに短い半ズボンでよ、
あいつの白い太ももが
まぶしくて目のやり場に困ったぜ。

何しに来たのかと思っていたんだけど、「あなた私のことを『俺の女だ』って言ったで

しょ」って言うからよ、それであいつが文句言いに来たのだとわかったんだ。俺はもう

ヒーローごっこもどうでも良くなっていたからよ、あっさり謝っちまったんだ。

「すまなかったな。ま、いきおいつてもものもあるからよ、あんなこと言っちゃまったけど

よ、別段悪気はなかったんだ。迷惑かけたか？ 悪かったな。謝る。許してくれ」

「おかげで男共が寄ってこなくなったわ」

「お前寄ってくる男なんかいたのかよ？」

「私をいじめてた男共よ」

「あ、そういう意味ね」

という事はこの女はお礼を言いに来たのか？ それにしてはお礼

をするって態度でもな

いし、良くわからん女だぜ。

「もういいだろ、帰れよ」

「なにしてたの？」

「なにもしてねえよ」

「うそ、マスかいてたでしょ」

「うるせえな、これからかこうと思ってたんだよ、おまえのパンツで」

「あつ、使ってくれてたんだ。少し嬉しいかも。よかった？」

「ああよかったぜ。おかげさまでよ、何度もヌケたぜ」

「新しいの売ったげようか？ ブラジャーとパンツで千円にしてあげる」

「金なんかもうねえよ」

「ふーん、けっこう貧しいんだ」

「お前、俺をからかいにきたのかよ。帰れよ、マスかくんだからよ、それとも見たいのか？」

「手でしてあげよつか？」

「えっ？」

「してあげる、手で」

「冗談。大体お前男のものなんか触れるのかよ。気持ち悪いだろうが」

「大丈夫、…だと思う」

「それに、最後は精液がドバツつと出てよ、手なんかべたべただぜ。飛び散って顔にか

かるかもしれないんだぜ。すごい臭いしょ」

「げっ、やっぱりやめようかな。でも頑張る」

まったく、これがかわいい女の子とする会話かよ、自分で言つてあきれちまつたぜ。

俺はすっかりからかわれているんだと思っていたけどよ、あいつ俺のそばに来てよ、かが

むと「どれどれこちら辺かな？ お元気ですか？」とか言いながら

俺のズボンの前を開け

ようとするんだ。俺はすっかりあわててしまつてよ、「ま、待て、シャワー浴びてくるか

ら」って言つて風呂場に飛び込んだんだ。

シャワー浴びながら考えたんだけどよ、どう考えてもしてくれないわけがないぜ（あんな

かわいい女の子が手でなんてよ）。俺はからかわれているだけで、

部屋に戻ればもうあの

子は帰ってしまっていて、あとでバカにされるのがせいぜいだぜ。そう思つてよ、体も汗

ばんでいたし、ついだと思つて石鹸使つてきれいに体洗つて、さっぱりして、タオル腰

に巻いて裸のまま鼻歌歌いながら部屋に戻つたら、まだあいつがいてよ、あわててしまつ

たぜ。もうどうにでもなれと思つてそのままベッドに腰掛けたら、あいつが寄つて来て腰

に巻いたタオルをめくりながら、

「どれどれ、お元気ですか？ わつ、キモッ、地球外生命体、これ生きてるの？」

「だから言つたんだ。無理だろう。やめとけよ」

「ううん、頑張る。えいっ」

「イッター！、お前、強すぎだつて」

「あつ、小さくなった。けっこかわいいかも」

「折れるかと思つたぜ。こういうのはそつとやるもんだぜ」

「そつか。こんな感じかな」

それで、あいつそつと触つてくれたんだけどよ、気持ちいいつたらないぜ。体中に電氣

が走つてよ、感電死するかと思つたぜ。あまりの気持ちよさに口もきけなくてよ、呆然と

していたぜ。駅前にはこういうことをしてくれる店があると聞いてたけどよ、これなら金

を払つてもいくはずだと思つたぜ、少しくらい高くてもよ（いくらなのかは知らなかった

けど）。あいつ初めてだったみたいだよ（当たり前だぜ）、ぎこちなかつたけど、一生懸

命してくれてよ、もうすぐにビンビンだぜ。あいつは手が疲れると左手に持ち替えたりし

ながら、必死に動かしてくれるのよ。だけど俺も女の子にしてもらうなんてはじめてでよ

（当たり前だぜ）、緊張してたのかなか出なくて、そのうち苦しくなってきたよ、し

ようがないからダーツとやってくれて言ったんだ。あいつも手が疲れていたんだろうな

これが最後だというくらいダーツと動かしてくれて、それでようやくドバツと出て、もう

気持良くてよ、全身はしびれるし、頭の中までしびれてよ、気絶するかと思っただぜ。長い

こと出なかったものだから、もうビンビン跳ね返って、そこら中精液が飛び散ってあいつ

の顔や体にもかかって、大変な騒ぎだぜ。あいつも驚いていたみたいだったけど、「わっ、

臭っさ」とか言いながら俺のあそこに顔近づけてよ、精液のついてる先っぽをぺろっと

舐めて「うっ、えぐっ、変な味」とか言ってるんだ。信じられないぜ。

俺はあまりに気持ち良くて、しびれたみたいになってしばらく動けなかったんだけど、

あいつは飛び散った精液きれいに拭いてくれて、「シャワーしてくる」って言って俺のT

シャツ持って風呂場に行っちゃったんだ。俺は気持ち良くて呆然としていたんだけど、な

んであいつがこんなことしてくれるのか分からなくてよ、なんか夢みたいだったぜ。

あいつ、俺のTシャツ着て戻ってきて、「後で返すね、あなたもシャワーしてきたら」っ

て言うから、ふらふらしながらシャワー浴びに行ったんだ。

シャワーして戻ってきたらもうあいつは帰った後でよ、俺はあいつともう少し話なんかしたかったから少し心残りだったんだけど、机の上を見ると、あいつのパンツとブラジヤーがきれいに畳んで置いてあつてよ、まさか忘れたのかと思ったんだけど、下に俺のノート破った紙があつて『五百円にしてやる。これでマスでもかけバカ』って書いてあるんだ。あのやろうと思ったけどよ、新しいパンツ貰えてうれしかったぜ（ただではなく五百円だったけどよ）。

次の日学校に行くときあいつは（いじめもなくなって）友達も出来たみたいでよ、にこにこしながら楽しそうに話しかけているんだ。それで昨日はやっぱりお礼をしに来てくれたのかなとも思ったけれど、あいつにつきまとう事になったら嫌がられるだろうからよ、話しかけるのはやめたんだ。でも金だけは別だからよ（なんか言い訳してるみたいだけど）、あいつのところに行って、「ほい、五百円」って言って五百円玉渡したんだ。あいつはにこにこしながら「毎度ありがとうございます」って言いやがつてよ、二回もパンツ買ってるんだから「毎度ありがとうございます」もいいけど、俺って女の子相手にこんな会話しか出来ないのかよ、まったく情けなくなるぜ。

謹慎も解けたし、もうバカなこともやめようと思つて反省文に「これからは勉強します」って書いてセンコーのところへ持っていったら、センコーの野郎「ふーん」とか言つて

よ、後は何も言わなかったぜ。

しばらくしたらテストがあつて（俺の行つてゐる高校はけっこう有名な進学校で（二流だけど）、毎月のようにテストがあつて、点数とか順番が廊下に貼り出されるんだ。皆その

結果を見て自分の勉強の進み具合見たり、受験する大学選んだりするんだ）、見るといつ

も最下位あたりをうろろしてたのに、今回は真ん中くらいだぜ。

教科書全部読んじまつ

たし、授業も結構まじめに受けていたから、こんなの当たり前だし、真ん中の成績くらい

でどうつてことはないけどよ、成績が上がるつてのはやっぱ気分がいいよな。それで家に

帰つて部屋でご機嫌に音楽なんか聞いてたら、あいつが来てよ、もうあいつが来る事なん

てないと思つていたから、なんだろうと思つたんだ。

あいつはひらひらのミニスカートにピンクのＴシャツでよ、かわいいつたらないぜ。

あいつにここにこしていてよ、何しに来たのかと思つて黙つていたら「してあげる。シヤ

ワーしてきたら」つて言うからよ、「この間の礼ならもういいぜ。

もう一回して貰つたか

らな」つて言つたんだ（ほんととしては貰いたかつたけどよ）。

「違うよ。成績が上がつたでしょ。そのご褒美」

「成績が上がつたら毎回してくれるのかよ？ 期待しちまうぜ」

「次は分からないけど、今日は成績が上がつたご褒美よ。いらないんなら帰るけど、どうする？」

「ま、待てよ。せっかく来たのによ、帰ることはないだろ」

俺はあわててシャワーに行つて、急いで体きれいに洗つて前みに腰にタオル巻いて

戻ってきたんだ。あいつはタオルめくりながら、

「どれどれ、宇宙生物は元気かな。わっ、元気みたいね」って言いながら前みたいに手

で一生懸命やつてくれたんだ。おれはもう気持ち良くてよ、口もきけなかったぜ。あいつ

も少しは慣れててよ、うまく手を動かしてくれて、俺も二度目だからそんなに緊張しなかつたんだろうな、結構早くドバつと出てよ、いや、もう、気持ちよ

かったぜ。あいつは精液が飛び散らないよう手で受けてくれて、それでまた俺のものの先

っぽへろつと舐めてよ、

「うえっ、やっぱり変な味」とか言ってるんだ。本当に信じられないぜ。

あいつはティッシュできれいにしてくれてよ、手を洗つてくると俺の前に立って「パン

ツ、置いてくね」って言つて、スカートたくし上げてパンツ脱ぐんだ。あいつの裸のあそ

こが見えそうだよ、どきつとしちまったぜ。それで脱いだパンツ渡してくれるからよ、

「お前そんなミニスカートで、パンツなくて大丈夫なのかよ？」って言つたら、

「うん、替わり持つてきてるから大丈夫」

って言つて、新しいパンツ出して、またスカートたくし上げてはくんだぜ。あいつの裸

のあそこがちらつと見えてよ、心臓が止まるかと思つたぜ。まったくこの女は、男の前で

平気でパンツ脱いだりはいたりして、襲われたらどうするんだよ。あいつはパンツはくと、

「ね、大丈夫でしょ」って言いながらスカートぺらつとめくって見せるんだぜ。パンチラどころかパンツ丸見えだぜ。おれは出してもらったばかりなのによ、またビンビンに立つちまったぜ。

「二回も買ってもらったから今日はサービスするよ、パンツはただでいいからね。あとはそれで自分でやってね。それじゃバイバーイ。かきすぎるなよ」あいつが帰った後、俺は前るときみたいにしばらくの間呆然としていたぜ。

それで（断っておくけど、あいつにして貰いたかった訳じゃないぜ）勉強しようと思つてよ、晩飯のとき母親に成績が上がったことを言つて、「今度は一番取るからよ、参考書代くれ」って言ったんだ。けどよ、なかなか信じてくれないんだ（ま、今までが今までだったからな）。でも一番取るには、参考書くらい揃えないととても無理だぜ。それでやつと二千元だけ貰ったんだけど、部屋に戻って考えてよ、二千元じや参考書一冊か二冊しか買えないぜ、少しくらい成績が上がっただけじゃ、あいつはしてくれないだろうしよ（結局それか）。悩んじまったぜ。

誰かノックするから誰かと思つたら親父がいて、だまって万券（一万円）渡してくれてよ、やっぱりこうゆう時は男同士だぜ。ソッコーで本屋に行つて参考書と問題集まとめて買ってよ、それでもちよつと考えて、千円だけ残してあいつのためにきれいなハンカチ買

ったんだ。

パンツのお礼のつもりだったんだけど、まさか「パンツありがとう」と書くわけにもいかないから、だいぶ考えて「パン　ありがとうよ」って「パン」と「ありがとうよ」の間に一文字分空けて袋の裏に書いてよ、これなら他のやつに見られてもパンのお礼だと思うだろ、まさかパンツのお礼だとは思わないだろうからよ。それで翌朝早めに学校に行って、あいつの靴箱に入れといたんだ。あとであいつ「男の子からもらっちゃった」ってうれしそうにあのハンカチ見せびらかしていたから、気に入ってもらえて嬉しかったぜ。

それからは勉強したぜ、いきなりアクセル全開でぶっ飛ばしてよ、体力はあるからほとんど寝ないで参考書と問題集やってよ、まだ次のテストまで間があるのに全部やっちゃったぜ（実は買った参考書の中に数冊ほとんど役に立たないやつがあったよ、しばらく勉強してなかったからカンが狂ったんだな。失敗したぜ）。それで困っちゃってよ、あんまり行きなくなかったんだけど（『背に腹はかえられぬ』ってやつだな）職員室行ってよ、センコーに「勉強したいんだけど参考書ありませんか」って言ったんだ。センコー黙ってしばらく俺の顔見ていたけどよ、「そこに見本で貰ったやつがあるから好きなの持っていけ。後で必ず返せよ」って言うからよ、「ありがとうございます」って言ってよ（素直なもんだけ、俺も中学のときは素直でよ、よく先生にほめられたもんだぜ）

、難しそうな五冊

くらい選んでよ、「これだけお借りします」って言ったら、ちらっと見て「さすがだな」

って言ってたぜ。

それでまた勉強したんだけど、今度のはさすがに難しくてよ、なかなか進まなくて骨が折れたぜ。

俺、実はあいつに一度申し込んだことがあるんだ。たまたまあいつと二人きりになった

ときがあつてよ、思い切つて「俺とつきあわないか」って言ったんだ。あいつに申し込む

にはよ、こんな俺でもけつこう勇気がいつてよ、必死だったんだぜ。でも「不良なんか嫌

いだ」ってあつさりふられてよ、がつくりだぜ。くいさがろうかとも思つたけれど、しつ

こくしてもよけい嫌われるだけだから、あきらめちまったんだ。でも、俺のことが嫌いな

女がよ、成績が上がったからって手で出させてくれてよ、その上先っぽまで舐めるかよ。

ふつう好きでつきあっている男にでもそこまではしないぜ（と思う。してもらつてる奴も

いるのかな）。ほんとうに良くわからん女だぜ。

でも近頃はあいつもいじめが無くなったせいかすっかり明るくなつてよ、いつもにこに

こしているし、もともと顔はかわいいからよ、他のクラスでも評判になつていて、交際申

し込みに来る奴もいるって話だぜ。俺から見たって本当にあいつかわいくてよ、これなら

俺なんかとつきあわなくても、もつといい男選ぶのに不自由はしないぜ。あいつとつきあうことになった男は、好きなときに手でして貰えるんだろうなと思ったらよ、マジでうらやましいと思っただぜ。

次のテストは自分ながら根性が入ったんだ。一生懸命勉強したしよ、期待してたしよ（一番になることに期待してたのかよ、それともあいつにしてみらうのを期待してたのかよ、自分ながら恥ずかしくなるぜ。あいつのパンツ握りしめて必死に勉強したなんてよ、他人にはとても言えないぜ）。

結果は学年十六番でよ、ま、急に一番取ろうと思っても他の奴らだつて必死だからよ、やっぱり無理があるぜ。それでも十六番なら次は一桁を狙える好位置という事で、前回の真ん中に比べれば大躍進つてところだけだよ、俺はそんな事よりもあいつが来てくれるかどうか心配で、家に帰ってもうろろろ落ち着かなかったんだ。でも心配することはなくてよ、あいつは「すぐく頑張ったんだね」って、にこにこしながらしてくれてよ、俺はいつものようにしびれる位気持ち良くして貰って嬉しかったんだけど、あいつは終わるといっつもパンツ置いてさっさと帰っちゃうだろう。もうパンツはどうでもいいからよ（欲しかったけど）、少しは話なんかしたかったし、あいつの顔だってもっと見ていたかったからよ、必死だったんだ。それであいつが帰っちゃう前になんとかなら

ないかと考えてよ、と

っさに思いついて「一緒に勉強しないか？」って言ったんだ。

「勉強？」

「一緒に勉強すればよ、わかんないところ教えあったりしてよ、効率的だしよ、お互い

励みにもなるだろ、いろんなことも話せるしよ」

「変な事しない？」

「しない、約束する」

「私に触ったりしたらすぐ帰るからね」

「触ったりしない。何もしないから一緒に勉強しようぜ」

「考えとく」

あいつはそういつてやっぱりさつさと帰っちまってよ、俺はがっかりしてただけだよ、

次の日あいつが「勉強しに来た」って来てくれてよ、まじうれしかったぜ。

それでテーブルに向かい合って座って、参考書やノート広げて一緒に勉強したんだ。ほ

とんど話すこともなかったけれど、初めてあいつと長い事一緒にいることができてほんと

うに嬉しかったぜ。しばらく一緒に勉強して、あいつ「帰る」っていつて帰っちまったけ

ど、それから毎日のように来てくれてよ、嬉しいったらなかったぜ。そのうち少しずつ

話なんかするようになって、だいぶ経った頃には、時たま冗談言ったりするくらいには仲良くなれたんだ。

そうして結構長い間一緒に勉強していたんだけど、ある時受験する大学の話になってよ、

あいつが「どこの大学受けるの？」って聞くからよ、センコーに出そうと思っていた志望

校の表見せたんだ（志望校の表といっても第一志望、第二志望、第三志望と三つの枠があってよ、そこに入りたい大学の名前書き込むだけの簡単なものだけだよ）。あいつなんだ
か一生懸命見ていてよ、ため息ついて「すごい大学受けるんだね」
って言うから

よ、俺はつい調子に乗って

「ま、男だからな、その位の大学出ておかないとハクがつかないぜ。就職にも有利だし
よ。そればかりって訳じゃないけど、大学出ても嫁さんも貰えないような安月給じゃ、
男として情けないってもんだぜ。その第一志望は、今の成績じゃちよつと難しいけどよ、
頑張れば行けると思うんだ。第二第三は滑り止めみたいなもんで、今の成績でもまず楽勝
だけだよ、ま、行くんなら絶対第一志望だな」とかぺらぺらしゃべ
つちまっただ。

考えてみればその頃からだと思っただけど、あいつ何か少し変になつちまっ
てよ（もと
もと少し変なやつだったけど、今度は少し違って）、何かやけに一生懸命勉強するように
なつちまっただ。それも一生懸命というより必死になっていると
いう感じでよ、どうし
たんだと思つちまっただ。

その内あいつ家にもあまり来なくなつてよ、聞いた話では学校が
終わるとすぐ塾の特別
講習受けに行ったり、家でも家庭教師つけたり、やたら一生懸命勉強して
るって言うんだ。
でも受験生なんだから当たり前といえば当たり前で、クラスにも塾に
いたり、家庭教師

ついたりしてるやつは大勢いたからよ、あいつも頑張っているんだ
なと思っただ。それで学校でもあいつ青白い顔してよ、必死に勉強してるからよ、話し
掛けないようにしたんだ（みんな受験生だからな、勉強してるやつ邪魔はしないとい
うのが不文律だぜ）。

俺はかなりマジで一生懸命勉強していたんだけど、第一志望の志
望校がこれがなかなか手強くてよ、いくら勉強してもちつとも合格ラインに届かないんだ。
はつきり言っ、入
学試験なんて受かってなんぼの世界だからよ、落ちりやそこら辺の
生ごみと一緒にだぜ（拾
つてくれる人もいないしよ、臭くて嫌われるだけだぜ）。

最後は俺も必死でよ、疲労と寝不足でよれよれになって、ふらふ
らしながら試験に行っ

たんだ。それでもどうにか合格できてよ、一安心だぜ。受かったと
いっても実感なんか

くてよ、俺は部屋の隅に座って壁にもたれてぼーっとしていたんだ。
そのときあいつが来てよ、なんかあいつも疲れた顔していたけど、
にこにこして、「お

めでとう、今日は口でするね」って言っ、口でしてくれたんだ。
俺は長い間してなく

て溜まっていたし、それに口でして貰うなんて初めてでよ、あつと
いう間にドバドバだぜ。

あいつは必死に口の中の精液飲み込んでいたけどよ、「うえっ、や
っぱり変な味」とか言

って口をすすぎに行ったんだ。戻ってくるとあいつは俺と並んで座
って同じように壁にも

たれてよ、体をくつつけるようにしたんだ。そうして長い間二人で

ぼーっとしていたけれど、その内あいつは立ち上がって俺の前に立つと、「お祝いにあげるね」って言うていつものようにスカートたくし上げてパンツを脱いだんだ。パンツ脱いだらすぐスカート降ろせばいいものを、たくし上げたままなのだからよ、あいつの裸のあそこが丸見えだぜ。

気がついた時にはあいつを夢中で押し倒していたよ。あいつは嫌がって抵抗していたけどよ、すぐにおとなしくなってよ、そのときは俺はもう理性なんてどっかにふっ飛んでいるからよ、むりやり突っ込んでよ、しっかり犯して中に出してしまっただぜ。思っていたとおりやつぱりあいつは処女でよ、そこら中血だらけになるし、あいつは泣くし（当たり前だぜ）大変な騒ぎだぜ。

あいつはびーびー泣いてよ、「死んでやる。死んでユーレイになって呪い殺してやる」
って言うてよ、おれは正気に戻って、とんでもないことしちゃったことに気づいて平謝りに謝ったんだ。最後は土下座までして謝ったんだけど、あいつ泣き止まなくてよ、とうとう俺もすっかり困っちまってよ、もう半分やけになって「チューしてやるからよ、もう泣くのはやめてくれ」って言ったんだ。そうしたらあいつ泣くのを止めてよ、「チュー？」
って聞くからよ、

「そうだ。チューだ。チュッとよ」
「少しじゃ嫌だ。うわーん」

「わ、わかった。お前の好きなだけチューって、それでいいだろう?。」

「ホント?。」

「ホントだ。好きなだけチューだ」

「よし、一割だけ許してやる。九割は呪い殺す」

「えーっ、たった一割かよ」

「泣いてやる。うわーん」

「わ、わかった。そうだ、抱っこもしてやる。抱っこしてチューだ。いいだろ?。」

「抱っこしてチュー?。」

「そうだ、いいだろ?。」

「少しじゃ嫌だぞ」

「わかった、お前の好きなだけ抱っこしてチューだ。それでいいだろ」

「よし、二割は許してやる。八割は呪い殺す」

「えーっ、たった二割かよ」と言いたかったけれど、それを言う
とあいつまた泣きそう
だったから

「とにかく抱っこだ、なっ」って言って、あいつを抱っこしてチ
ューしたんだ。

でも考えてみたらあいつを抱っこするのもチューするのも初めて
だよ、あいつを抱っこ

するとちっちゃくてかわいいしよ、ふわふわして柔らかくて暖かい
しよ、なんかいい匂い

はするし、あいつの唇なんかやわらかくて吸い付きそうだしよ、あ
いつには悪かったけど

よ、初めて抱っこできたしよ、初めてチューもできてよ、たまらな
かったぜ。

それで長い間あいつを抱っこしてチューしてよ、ようやくあいつ
は落ち着いたのか、泣

き疲れたのか、うとうとし始めてよ、そのうち抱っこされたまますーすー寝てしまったんだ。それでも約束だからよ、俺はあいつをずーっと抱っこしていたんだ。長い事抱っこしていて手もだるくなって足も痺れて、すっかり感覚がなくなった頃あいつは目を覚ましてよ、泣いた後でまだ少しはれぼったい目を眠そうにこすりながら「帰る」って言って帰っちゃったんだ。

その後あいつはぶつつり来なくなっちゃったんだ。当たり前だぜ、襲っちゃったんだから。俺はすっかり落ち込みましてよ、せつかく大学に合格したつてのに、まったく暗い人生になっちゃったぜ。何度もあいつの所に謝りに行こうと思ったんだけどよ、何言われるかと思ったら恐くてよ、とうとう行けなかったんだ。本当に情けないぜ。

その内、入学式の日が来てよ、またその日はやけにいい天気だよ、「空は晴れても心は闇だ」とはよく言っただぜ。一応親の用意してくれた黒のスーツで見かけだけは決めたけれど、中身の心はすっかりしょぼくて、とぼとぼ入学式に行ったんだ。

そうしたらあいつがいて、俺は息が止まるほどびっくりしたんだ。あいつは俺を見つけると走ってきて、にこにこして俺の腕にぶら下がってよ。周りの奴らは、俺がかわいい女の子にぶら下がっているから、うらやましそうな顔をしてたけどよ、俺は何が何だかわ

からずに、「お前、どうしてここにいるんだ？」と聞くのがやつとだっただぜ。

あいつは「驚いた？ 私だってこの大学に入っただもん。また一緒だね。嬉しいなー」って言って、ふざけて俺に抱きついたりしてよ。俺はまだ何だか良くわからなくてよ「お、俺でいいのかよ？ 俺はおまえを襲っちまったんだぜ」って言っただ。

あいつは変な顔をして、

「えっ？ 襲ったって何の事？ この間のことを言ってるの？

あのとき『お祝いにあげるね』っていったじゃない。いきなり押し倒すんだもの、ちょっとびっくりしたぞ」

「えっ？ そういう事だったのか？ 俺はてっきりいつものパンツだと思って…」

「えーっ、ひどーい。中身よりパンツのほうが良かったの？ 泣いちゃうぞ」

「えっ？ …そりやもちろん中身の方がいいけどよ、いや、そうじゃなくてあのあと、

おまえビービー泣いていたし…」

「そりや泣くよ、処女なくしたんだし、すごく痛かったんだぞ。

それにあんなに乱暴にするし、ほんとは少し恐かったぞ。でもしょうがないよね、男の子だもの。夢中になってしまったんでしょ。あんな時は、女の子に謝るんじゃないで、優しくするもんだぞ。でも

最後は抱いてもらって嬉しかったよ」

「そ、そうなのか。でもあの後ぱったり来なくなっただから…」

「うん。帰ったら受験勉強の疲れが出てずっと寝込んでいたんだ。ようやく起きれるよ

うになったのは昨日だよ。一度くらいはお見舞いに来てくれてもいいだろうと思っただぞ。

薄情者」

「そうだったのか。すまん。ちつとも知らなくて…」

「それでもがんばって入ってよかったよ。これから四年間も一緒だね。うれしいな。し

たくなったらいつでも言ってね。すぐにしてあげるからね。手でも口でもお好みだぞ。入

れてもいいし、キャツ、恥ずかしい」

俺はまだ話がよくわからなかったけれど、あいつが怒っていないのだけはわかってよ、

あんまり嬉しくてあいつを抱きしめてチューしてしまったぜ（人前でチューなんかしてっ
て、後であいつに怒られたけどよ）。

その後どうなったかって？ あいつは今俺の隣に座ってるよ、奥さんと名前を変えてよ。

もう結婚してからだいぶ経つぜ。俺は最近になって知ったんだけど、あのときの話がよ、
なんか少し違うんだ。

もともと俺の親とあいつの親は知り合い同士だよ、俺の母親はあいつの家に行って「うちの息子は高校に入ってからケンカばかりしていて」といつもこぼしていたらしいんだ。

それである時「好きな女の子でも出来れば少しはおとなしくなるかもしれないね」って話

になってよ、たまたま傍にいたあいつに「どう？」って聞いたらしいんだ。そうしたらあ

いつ大喜びでよ、にこにこしてOKしたらしいんだ。

この話と今まで俺がしてきた話とどうつながるのか良くわからない

いんだけど、成り行き
がどうあれ、俺が嫌がるあいつを押し倒して（あんまり嫌がって
いなかったみたいだけ
ど）、やっちまったことに変わりはないんだからよ、そこはすじを
とおして、奥さんにす
るのが男つてもんだらう。

断わっておくけどよ、俺は決して嫌々あいつを奥さんにしたわけ
じゃないんだぜ。それ
どころかあいつみたいなかawaii嫁さんを貰えて俺はマジで嬉しか
ったんだ。あいつがい
てくれたおかげで大学生活はそれは楽しかったし、あいつはやさし
くてよ、今でもちよっ
と頼めばすぐ手でしてくれるし、もうちょっと頼めば、口でしてく
れるんだぜ。他の奥さ
んがどうなのかは知らないけれどよ、俺にはもったいないくらい
のかawaii大事な嫁さん
なんだ。

だけだよ、すぐ泣くのだけはどうにかならないのかよ。何かある
とすぐビービービー
ビー泣いてよ、ちつとも泣き止まないんだ。こうなるともう長い事
抱っこしてやってよ、
あいつの気の済むまでチューしてやらないと泣き止まないんだぜ。
最近はずいいてよ、あ
いつは泣いているんじゃない（泣いてはいるんだけどよ）俺に甘
えているみたいなんだ。
でもよ、もう子供が三人もいるんだからよ、そろそろやめてもらわ
ないと子供が
まねするだらう。一番上の娘なんかは（まだ幼稚園なのによ）、気
に入らないことがある

と「泣いてやる」って言ってビービー泣いてよ、散々抱っこしてやらないと泣き止まないところなんか母親そっくりだぜ。あいつと子供が一緒に泣き出したら、もう子供^{ガキ}

が四人もいるみたいでよ、まったくたまらないぜ。

それでもよ、あいつを抱っこするとちっちゃくてかわいいし、ふわふわして柔らかくて

暖かいしよ、なんかいい匂いはするし、あいつの唇なんかやわらかくて吸い付きそうだし

よ、あの初めて抱っこしたときと同じでよ、まったく変わらないぜ。変わったところとい

えばそうだな、少し重くなったかな。

（痛てっ、なんで殴るんだよ。俺はお前が太ったなんて言っていないだろう。同じ事だ

って？ わっ泣くな。子供まで泣くだろうが。わかった、わかったって、俺が悪かったっ

て、いま抱っこしてやるからよ、泣くなって。な、抱っこしてチューだ、いいだろ。）

すまん、話が途中で悪いけどよ、ちょっと手が離せなくなっちゃまったから、続きはまた

機会があればって事でよ。ま、みんなもせいぜい頑張ってくれや。

（わかったって、今抱っこしてやるからよ、泣くなって、なっ、抱っこしてチューだからよ……）

終わり

(後書き)

投稿するのなんかしんどくなってきましたが、がんばります。え
ーと、4つつ目かな？
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3588t/>

泣けばいいってものなのか？

2011年5月18日07時41分発行